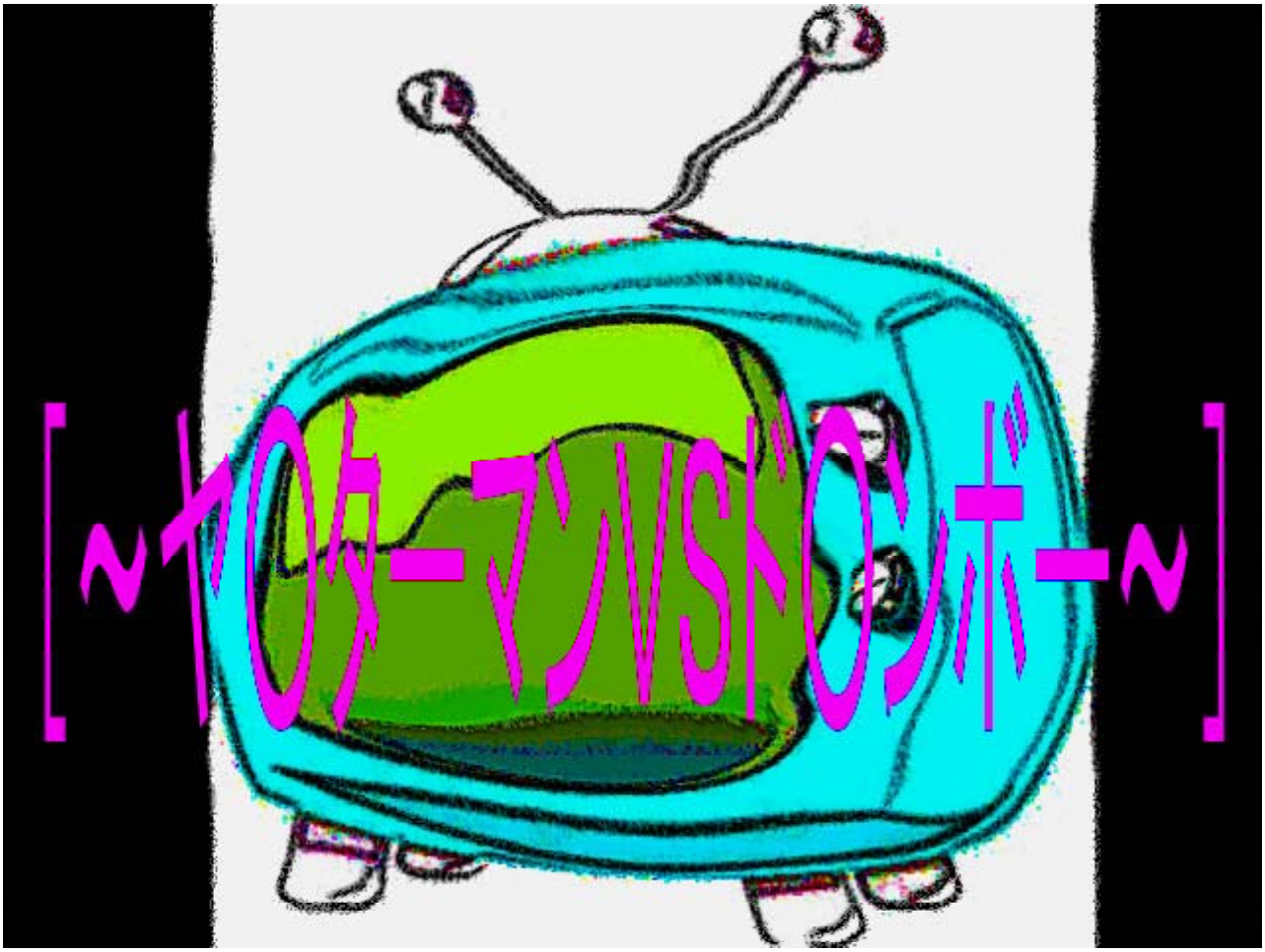

アニパロ妄想今昔物語

～ヤ○ターマンＶＳド○ンボー～

それは少し昔のお話しです。
年号が変る前、テレビがまだブラウン管だった頃の物語。

薄型テレビもインターネットもスマートフォンも携帯電話もプレステーションまだなかった時代のお話しです。
テレビは今と違って、娯楽の王様でした。
スポーツは野球人気が強く、まだＪリーグも発足しておりませんでした。

……今と変らぬ人気を誇るのはテレビアニメだけ……。

この物語は、それら人気アニメの裏の物語です。

この、妄想今昔物語をお読みいただくのは難しくはありません。
心の中にある妄想チャンネルをこの物語へあわせていただくだけで良いのです。

さあ、あの頃のあのアニメにチャンネルをチューニングをしてください。

****

「ヤ〇ターマン」というアニメは、大きなお友達に、夢と希望と妄想を与えていた。

正義の味方ヤ〇ターマン。そして悪の泥棒一味であるド〇ンボー三人組。

ドロ〇ボー一味は毎回、良いところまで争うが、最後には大爆発して負けてしまうというお約束が待っていた。
だがこの妄想チャンネルでは、ブラウン管の裏側で行われている出来事を見ることができる。

ブラウン管の裏側の世界では、ドロ〇ボー一味が勝利している物語があった。
ヤ〇ターマン一号、ヤ〇ターマン二号であるガンちゃんとアイちゃんは、ドロ〇ボー一味のアジトに監禁されていた。

倉庫のような部屋に、二人は両手を鎖で繋がれて吊されている。
ヤ〇ターマン二号のアイちゃんには、ボヤ〇キーとト〇ズラーがすぐ側で監視している。

そしてヤ〇ターマン一号である、ガンちゃんにはドロボー一味の首領であるド〇ンジョがすぐ側にたって、笑っていた。

「ヤ〇ターマン一号。良い姿じゃないかい。正義の味方もこれでは台無しだねぇ。いつもいつもあたし達がだけやられてる訳じゃないンだよぉ〜」

「そうでマンネン。わいらかて、いもついつも負けるとは限りままへんマンネン」

「そ〜よ、そ〜よ、ソーなのよ〜。いつもはポチッと自爆ボタン押しちゃうところだけど、こういうときもあるのよね〜〜」

「く、くそうー。二号を離せー。アイちゃんを解放しろ！」

「おやまぁ、元気だねぇ～。さすがだねぇ～～。ながれいしだね～～。でも、今回は負けちゃったし、ここはよい子の知らない世界なのさ～。ここでは大人の拷問のしかたってのが、あるんだよぉ～～」

ビシーッ！

ビシーッ！

ビシーッ！

ビシーッ！

ド〇ンジョのムチが風を切って唸る。
手加減なしの本気の鞭打ちだった。
いつもはボロボロにやられて無惨な姿をさらす三人組だが、今日はまったく正反対だった。
鞭打ちは容赦のないものだった。それは二号にまで及んでいる。

「アアーッ。イヤーッ！」

「アーッ。アアーッ！」

「そうだよ、もっと泣き叫ぶんだよ。いつもはシビレステッキだ、ケンダマジックだと散々好き放題にいたぶってくれてたんだから、今日はタップリとお返ししてあげるよ～～！」

「なんか今日のド〇ンジョ様は、鬼気迫る迫力があるわね～」

「ド〇ンジョ様。なんかすごく怖いマンネン」

ビシーッ！　バシーッ！

バシッバシッバシッーー！！

「アーハッハッハッ～～～。そらそらそらーっ。もっと叫ぶんだよ～～。泣くんだよ～～～。あたし達に許しを乞うんだよ～～！」

「一号はんと、二号はんがド〇ンジョ様に鞭打たれてるとこ見てたら、なんか変な気分になってくるマンネン」

「本当よねぇ。背筋がゾクゾクしてるわ～～～」

「うるさいよ、お前たち――」

「ぎぉあーッ！」

「許して、許してド〇ンジョ様～～」

ボヤ〇キーとト〇ズラーにも鞭が飛ぶ。
背中を数発、鞭打たれて転がる二人。だが、どこか二人もうれしそうだった。

「ああ、ド〇ンジョ様。もっと、もっと〜〜〜」

「そうや、もっとしてほしいマンネン。気持ちいいマンネン」

「ええーい。気持ち悪いこと言うんじゃないよ〜。お前達は、二号を可愛がっておやり、あたしはこれからタップリと、一号を可愛がってあげるのさぁ〜〜」

「あ…、や、やめろ……」

ド〇ンジョの革の手袋をした手が、一号の胸や肩をいやらしい動きしながら這い回っている。
だがそれは不思議な感覚だった。今までの鋭いムチの痛みとは違った、柔らかく優しい感触。
背筋を這い上ってくるような、ゾワゾワする感触に一号は戸惑っていた。

（……な、何だこの感覚は……。アイちゃん、変な気分になっちゃうよ）

「イヤーッ。ダメー、ガンちゃーん！」

「ほらほら見てご覧よぉ。お前の良いオトコが、変っていく姿が見えるだろう……。ほら、ここはどうだい。…気持ちいいだろう…」

「…ハア、や、…ハア…。やめろ……」

　ヤ〇ターマン一号であるガンちゃんの声は、弱々しいものへと変っていった。
　乱れた吐息が、熱いものへと変っている。
　それを見せられて二号のアイちゃんは身悶えしていた。

「さあ、良く見ておくんだよ。……今度は、ここだよ。ズボンの中身を見せてあげるよぉ」

「…や、やめろ。アイちゃん。見ないでくれぇ……」

「ほぉ〜ら、どうだい。これがヤ〇ターマンのチ〇コだよ。モザイクなしだから、はっきりとみえるだろう。可愛いねぇ。まだ完全に剥けてないじゃないかァ。フフフフ……。あたしがじかに指で剥いてやろうかねぇ〜」

　そこに現れたは、本放送では絶対に見ることのできない物体だった。
　若い勃起が、隆々と屹立している。
　だが、先端はまだ半分皮をかむった仮性包茎の状態だった。

　その若い男性器に、ド〇ンジョの指がまとわりつくように貼り付いてくる。
　手袋をしたままの指で、皮を剥いていく。
　そこに現れたはピンク色の綺麗な亀頭だった。